司法書士界版

日司政連の政治資金収支虚偽記載問題

会から単位政連へ利益供与の実態も

背景に癒着隠ぺい目的か

埼玉会の司法書士有志が、政治資金収支報告書の虚偽記載で、日本司法書士政治連盟の会計責任者らを刑事告発した問題（本紙1836号）では、各単位政連からの「寄付」を、存在しない個人会員からの「会費」として偽装していたことともに、強制加入である司法書士会からの単位政連への違法な利益供与の実態も明るみになっている。これらは、単位政連が会員から集めた会費に混入されて、日司政連に上納される形になる。告発した司法書士側は、単位政連と単位司法書士会の癒着の問題を隠ぺいし、日司政連の資金源が個人からの「浄財」のみであることを装う目的が、虚偽記載の背景にあるのではないかと、問題視している。

利益供与の実態は告発した司法書士が、全単位司政連の過去三年分の政治資金収支報告書を調べて判明したもので、単位政連が、強制加入の公益法人である司法書士会から金銭や、無償・低額での事務所・職員の提供を受けているケースが多数確認された。

告発状が指摘するケースは、▽岩手県会から日司政連岩手会へ毎年「助成金」支給【違法寄付】▽大阪会から大阪司政連へ平成十八年八十九万円、十九年百六十五万円、二十年百七十万円の交付▽新潟県会から日司政連新潟会に「事業委託費」名目で毎年三十万円の交付▽東京会から東京司政連へ十九年「資料提供費」名目で五十万円、二十年「業務委託費」名目で五十二万五千円交付▽和歌山会から日司政連和歌山会へ毎年「業務委託費」十万円交付【以上、偽装寄付の可能性】――など。

また、告発した司法書士によれば、確認できた埼玉を除くすべての単位司政連の事務局は、単位司法書士会事務局と同一で、現実は無償か低額で事務所と事務職員の労務が提供されており、事務所費年間ゼロの単位司政連が六団体、一円以上十二万円以下が、二十四団体に及んでいる、という。

同司法書士は、こうした実態が虚偽記載や不記載の動機とみて、違法な利益供与を隠し「個人会費」と偽装した手法は「一種のマネーロンダリング」としており、行政書士会の政治団体への金員の寄付と同視できる行為を違法・無効とした平成二十年の大阪高裁判決にも違反する、としている。

◇司法書士界関係情報、催し物などを本紙編集部までお知らせ下さい。編集部☎〇四六七(六一)二五三三、FAX〇四六七(六一)三六三〇

過払い利息返還請求の履歴

信用情報から除外へ

金融庁方針

金融庁は十二日、貸金業社が貸し出しを判断する際に、借り手が過払い利息を返還請求した、という履歴を反映させない方針を明らかにした。同日、消費者金融会社など約千四百社が加盟する日本信用情報機構（JICC）に伝えられた。同返還請求をした事実は、「コード七十一（契約見直し）」という情報に登録され、信用情報の一つとして判断の参考に使用されている。

改正貸金業法が完全施行されると、総量規制の導入で、返済能力を調査するため、個人が借り手の場合、指定信用情報機関の信用情報の使用が義務付けられる。

先月二十四日に指定信用情報機関としての指定を申請したJICCは、同庁の「貸金業制度に関するプロジェクトチーム」の第三回事務局会議で、加盟会員へのアンケート調査結果などから、「コード七十一」について、①多重債務防止に有効に機能している②廃止されれば、他の情報で信用リスクを示すことができなくなる③同情報があっても、信用リスクに応じた与信判断がされている――との分析結果を示し、取り扱いの継続を訴えていた。

同庁が昨年六月に公表したパブリックコメント募集結果には、「現行の契約見直し登録は廃止し、すでにある登録は削除してほしい」、「過払い金は貸金業者が自主的に返還すべきもので、信用情報機関に載せる情報ではない」、「過払い金請求の事実がブラック情報として扱われ、借入れができなくなることを恐れ、同請求を断念する借主がいる」など、過払い金返還請求をした事実が、信用情報として登録されないよう求める意見が目立っていた。

不登電子申請件数

前年比60万件増加

法務省まとめ

昨年の不動産登記のオンライン申請件数は約百六十万件を超え、前年と比べると、約六十万件の増加となったことが、法務省がまとめた速報値で分かった。同省が公表している登記統計によると、昨年の不動産登記のオンライン申請利用率は十一月末までで一二％となる。速報値で同申請件数が最多だった十二月が含まれれば、利用率の増加も予想されるが、二十一年不動産登記の同申請利用率について、同省が示している数値目標「年間利用率二〇％」までは届かない見通し。

同省の二十一年オンライン登記申請件数の速報値によると、不動産登記は、年計百六十二万百件（二十年、計百二万二千三百四十七件）。月平均は十三万五千八件で、月別では最多が十二月の十八万三千二百四十六件、最少が一月の十万四千二百九十五件となり、全ての月で十万件をクリアした。

また、二十一年の商業・法人登記の同申請件数は、前年から五万六千六百七十三件増となる二十九万千七十四件だった。

勝瑞豊の 司法書士界 縦横無尽

<554>

2010年元旦 人生坂道は下り坂

焼け跡に無理をして組みたてた日本の近代・経済社会の構造が崩れ始めている

「『みんなと力を合わせて世の中をよくする』（〈利〉志向）や『しっかりと計画を立てて、豊かな生活を築く』（〈正〉志向）といった未来中心の考え方」。

これは若い人ばかりではなく普通の勤労市民からも失われていると思う。そうした価値感情や意欲への信頼と安心が失われている。私は消費者金融の問題が片付けば、年間自殺者三万人問題は、かなり改善されるかと予想していたが少しも改善されない。金の問題が自殺の直接の引き金ではないということが分かった。

「『しっかりと計画を立てて、豊かな生活を築く』（〈利〉志向）や『みんなと力を合わせて世の中をよくする』（〈正〉志向）といった未来中心の考え方」のなかで生きてこられたのは一九六〇年代生まれ、現在五十歳代以上の人たちではないかと思う。

この人たちが二十歳代だった一九八〇年代は、世界の中で日本がもっとも輝いた時代だった。一九九〇年代には、不動産バブル崩壊に遭遇しているが、大企業労働組合員も公務員もその暮らしや運命が激変するようなことはなかった。そして、今でも心の中のどこかでは「世の中は良くなる、景気も回復して何とか老後もしのげるだろう」と思っている。

一九七〇年代生まれ、現在四十歳代以下の人たちは、全くそのような楽天的な考え方、フィーリングを持っていないだろう。一九九〇年代二十歳代であった、就職氷河期に始まるこの世代は二〇一〇年の今日までの二十年間、長引く不況の、正確に言えば七割を占める国内市場を相手とするドメスチック産業の、未だに先の見えない不況の中にあってやっと糊口をしのいでいるという状態なのだ。

「『その日その日を自由に楽しく過ごす』（〈快〉志向）や『身近な人たちとなごやかな毎日を送る』（〈愛〉志向）といった現在中心の考え方」を生きているのは一九七〇年代生まれ、現在四十歳代以下の人たちであるが、日本の場合は「その日その日を自由に楽しく過ごす」のは明日として当然の反応というしかない。

植木等の「サラリーマンは気楽な稼業ときたもんだ♪♪」という掛け声で始まった人よりモノの論理を先行させて、焼け跡に無理をして組み立てた日本の近代と経済社会の構造が、今や、世界からも、日本社会の内部からも崩され崩れ始めている。

老紳士とイブニングドレスの老婦人がダンスを楽しんでいる。

しかし、今この国を支えている四十歳代、それ以下の人たちは、明日が分からないから「その日その日を自由に楽しく過ごし、身近な人たちとなごやかな毎日を送」っている。

少子高齢化という戦後日本史の結果は、敗戦という事実に直面せず、戦後一貫して軽視してきた、この国の基本法、憲法とそこに含まれるリベラリズムの意味を真面目に学び、それを政治に生かし、国民に教育してこなかった、そのことの単なる結果に過ぎないのである。

「人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか」（水野和夫・日本経済新聞出版社・二〇〇七年）で水野氏は、豊富な実証資料を解析して、一九九五年から日本経済、明治以来の日本近代は、全く質の異なる局面に置かれており、そのパラダイムシフトについて、政治家も官僚もメディアも知識人も全く理解していないと主張されている。

経済成長の時代は、終わったのだ。無限の経済発展や生活向上などはない。景気の良し悪しが庶民の暮らしに影響を及ぼすこともない。三割の、三菱や東芝や日立やソニーといった世界を市場としている大世界企業と、残り七割の国内市場を相手にしているドメスティック産業（マスコミも建設流通そして資格業も）は、その利害を全く異にすることになってしまった。

生産性の格差も広がるばかりである。この国に生きるわれわれは、グローバル化時代にふさわしい新しい社会国家目標を立てねばならないだろう。それを作るのは「一九六〇年代生まれ、現在五十歳代以上の人たち」ではない。この人たちに刷り込まれた経験や、近代崩れの哲学のない知識ではそれを作れといっても無理なのである。パソコンもモバイルの利用にも不器用だしね。これが作れるのは、まさにそれが自己の利益そのものということもあるが「一九七〇年代生まれ、現在四十歳代以下の人たち」なのである。

「一九六〇年代生まれ、現在五十歳代以上の人たち」から学ぶものは無い。「一九七〇年代生まれ、現在四十歳代以下の人たち」はいったん「一九六〇年代生まれ、現在五十歳代以上の人達」の文化を遮断して未来を構想してみることだ。

一方、ヨーロッパの人たちは「『その日その日を自由に楽しく過ごし、身近な人たちとなごやかな毎日を送り』定年がくればやっと仕事から解放される」と、老カップルが、人生の夕暮れを豪華客船のデッキで潮風にあたりながら楽しみ、船内クラブではタキシードの世の中や世の中の方向が見えないからであり、「身近な人たちとなごやかな毎日を送る」のは、東京都からもらった二万円の交通費で酒を飲んだ失業者が許せないとメディアで吼える日本テレビの若造のようなのが満ちている、寛容もゆとりも失っているような社会においてはせめてものことである。

（東京司法書士会会員）